# 地球を旅するピースボート

ACROSS BORDERS

## 「旅と平和」エッセイ大賞を募集中!!

**大賞受賞者には「ピースボート地球一周の船旅ご乗船券（一年間有効）」を進呈いたします。** ※応募資格30歳未満

### 「若い才能への期待」

選考委員長　鎌田 慧（ルポライター）

旅は人を鍛えるが、船旅は人を変える。
大海のうえを流れる無限の時間、そのなかを進むちいさな宇宙としての客船。思いがけない出会いがあり、予期することのなかった発見がある。古来、船旅から多くの作品が生まれた。ピースボートが若い才能を引きだすための支援に乗り出す、というのを聞いて、わたしはその成熟を喜び、全面的に協力することにした。

● 詳しくは募集要項をご覧ください ●　http://www.peaceboat.org/projects/essay

PHOTO : PEACEBOAT, Brami JEGAN, CHIGA Kenji, ENDO Kazuhide, MASAGAKI Naoto
MIZUMOTO Shunya, NAKAMURA Mitsutoshi, Stacy HUGHES, SUZUKI Shoichi
UCHIDA Kazutoshi, USHIJIMA Yu, YAMAKI Kaori

# 30年の時を越えてゆく未来への航海

ピースボートの第1回クルーズが出航したのは、1983年。当時は東西冷戦下で、まだ国境を越えること自体が困難な時代でした。それから30年の時を経て、世界情勢は大きく変化しました。しかし、ピースボートがめざすものは変わっていません。それは、船旅を通じて、国と国との利害関係を越えた、人と人とのつながりを作っていくことです。

ピースボートはこれからも、人びとが絆を深め、支えあい、共感できる架け橋となるために、船を出し続けます。

1990年、ピースボート初の地球一周の船旅で寄港したコリント港（ニカラグア）では、8000名を超える人びとが港に集まり、寄港を出迎えてくれました。

## 待っていてくれている人がいる旅

ピースボートの大きな魅力は、何といっても世界中の人たちとの出会い。訪れる国々で、現地の人たちが私たちの訪問を楽しみに待ってくれています。現地のNGOや学生たちとの交流、社会問題を学ぶツアーなど、バラエティーに富んだ活動が、その出会いをつなぎました。

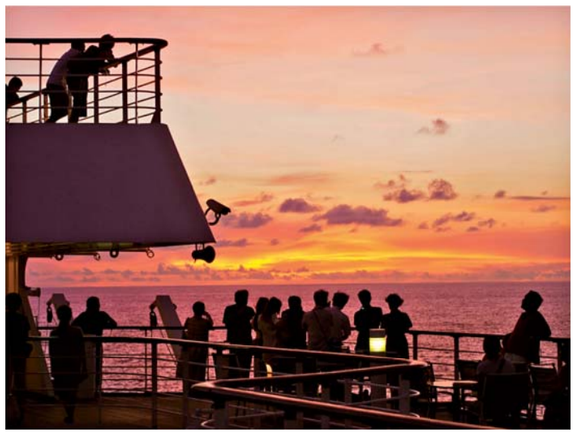
## 神秘の大自然や世界遺産をめぐる

誰しもが一度は行ってみたいと思うような、想像を絶する大自然や世界遺産との出会いも船旅の楽しみ。その美しい自然が危機にさらされる地域が増えている現在、ピースボートは訪れる人が環境に配慮するような新たな観光のあり方も模索しています。

## 心にも身体にもやさしい洋上生活

船は単なる「移動手段」ではありません。日常のわずらわしさを離れ、洋上でゆったりとした時間をすごせるのは船旅ならでは。

360度、遥かに広がる水平線を見渡しながら、物思いにふけったり、友人と語りあうことで、身も心もリフレッシュされていきます。



### ピースボートの船旅は…

ピースボートはこれまで30年間に、53回の地球一周の船旅を含む80回を超えるクルーズをコーディネートし、のべ5万人以上の参加者とともに、世界中180以上の港を訪問してきました。船内には0歳の赤ちゃんから100歳の大先輩まで、さまざまな職業・経歴の方々が世代を越え、国籍を越え参加していらっしゃいます。

（※ 数字は2013年11月現在）

Korea

## 教科書では学べない歴史を学ぶ

韓国では、太平洋戦争中の日本軍に「慰安婦」となることを強要された女性が存在しました。

ピースボートは、韓国民主化後に声を挙げ始めた元「慰安婦」の方々の話を聞く場を船内で設けたり、彼女たちが共同で暮らしている韓国「ナヌムの家」を訪れるなど、日本の教科書では学べない歴史を見つめています。

船上での追悼セレモニー

South Africa

## 南アフリカで困難の中に生きる人びととつながる

長く続いたアパルトヘイト（人種隔離政策）を克服した南アフリカ。しかし貧富の差は開いたままで、多くの人は今も旧黒人居住区に暮らしています。

ピースボートは、そんな中でも力強く生き抜く人びととつながり、子どもたちの未来を支える現地NGOなどを通じて、サッカーボールや楽器の支援を行いながら交流を続けています。

旧黒人居住区の高校を訪問（南アフリカ）

Eritrea

## 内戦で傷ついた人びとを応援!!オリンピックキャンペーン

オリンピックは本来、平和のための祭典です。そのことを訴え、ピースボートではさまざまなキャンペーンをオリンピック開催地で行ってきました。

特に1996年のアトランタオリンピックの際には、その3年前に30年間の内戦の果てに独立を実現させたばかりのエリトリア（アフリカ）の自転車競技団の出場を支援するプロジェクトを実施しました。

来日したエリトリアの自転車競技選手

Venezuela

## 子どもたちに夢と希望を!! ベネズエラの無償音楽教育

ベネズエラ国内で30万人以上が参加する無料の音楽教育システム「エル・システマ」。貧富の格差の激しいこの国で、子どもたちに夢と希望を持ってもらおうとはじまったこのプログラムは、子どもたちの健全な成長に貢献し、世界レベルの音楽家も輩出しています。

ピースボートは、楽器の支援とともに「エル・システマ」のオーケストラをクルーズに招き、日本を含め世界各地でコンサートを行っています。

日本からのバイオリンを手渡す（ベネズエラ）

Cuba

## チェルノブイリの子どもたちから福島の子どもたちへ

チェルノブイリ原発事故により被曝し、傷ついた子どもたちの療養を、キューバは無償で受け入れてきました。原発事故から30年近くたった今も、病気になる子どもたちは減ることはありません。ピースボートは遠く故郷を離れ、ひとときの保養をする子どもたちにおもちゃや文房具を送るなど、触れ合いを続けてきました。そして、そのときの思い出を胸に今、福島の子どもたちへの支援を行っています。

チェルノブイリ被曝児療養所（キューバ）

Bosnia

## 旧ユーゴスラビア内戦の傷跡

90年代、かつて一つの国だったユーゴスラビアから、各共和国が次々と独立する過程で、多くの内戦が引き起こされました。特に、最も激戦となったボスニア・ヘルツェゴビナでは20万人以上の犠牲者を出しました。

ピースボートでは船内講座や現地へのツアーを通じ、戦争の本質を検証し、紛争予防や平和構築の重要さを見つめてきました。

旧ユーゴスラビアの激戦地モスタル（ボスニア）

PEACE BALL

## スポーツを通じて国際交流ピースボールプロジェクト

世界にはサッカーボールを入手できず、つぶしたペットボトルを蹴りあう子どもたちが大勢います。そんな子どもたちとスポーツを通じて交流の「架け橋」になることをめざしているのがピースボールプロジェクトです。

サッカーボールを直接現地の子どもたちに手渡し、実際にサッカーのゲームも行います。1999年から43カ国に12,400個以上のサッカーボールを届けてきました。

サッカー交流（エリトリア）

P-MAC

## 地雷ゼロそして生活支援地雷廃絶キャンペーンP-MAC

内戦が終わったカンボジアやアフガニスタンには、膨大な数の地雷が残されました。そうした国々での地雷除去を支援するため、P-MACでは日本国内で募金活動や、地雷の非人道性を学ぶ出前教室などを行ってきました。

1998年から14年間で、137万平方メートル（東京ドーム約29個分）の土地の地雷を除去。その跡地に3校の小学校と1つの保健所の建設も支援しました。

地雷除去現場を見学（カンボジア）

# 世界の先住民族とのあゆみ

かつては先進国から「劣った存在」と見なされて人権を抑圧されてきた先住民族でしたが、現代社会が直面するさまざまな問題を解くヒントが、実は彼らの考え方や生き方にあることを多くの人が気づき始めています。

ピースボートでは、先住民族の人たちと同じ目線で人権を守る活動を行うとともに、彼らが受け継いできた伝統や知恵に触れることで、私たちの社会を見つめなおすきっかけにもしています。

**リゴベルタ・メンチュウ**
**（人権活動家/ノーベル平和賞受賞者）**

マヤ先住民として、グアテマラはじめラテンアメリカの先住民族の人権回復に尽力するリゴベルタさん。2013年のピースボートクルーズに水先案内人として乗船され、船内の講演で、右記のようなメッセージをいただきました。

## 人びとの意識を変える ピースボートの活動

居心地のよい空間と、学びの多い場所を提供できるピースボートの船旅は、船上と現地に暮らすの人たちの文化をつなぎ、人びとの意識を変える活動です。

私自身も船の中で感じた皆さまの敬意の心や細かな心遣いは、友愛の精神そのものだと思います。ピースボートの益々の発展をお祈りしています。

Okinawa

## 沖縄の基地問題と向き合う

太平洋戦争末期、島民10万人以上が犠牲となった沖縄には今も基地問題が重くのしかかっています。日本全土の0.6%の土地しかない島に、在日米軍基地の74%が集中し、米兵による犯罪行為や、騒音問題もあとを絶ちません。

ピースボートは、沖縄の日常を脅かし続ける基地の現状を変えようと、現地で活動する人たちとつながり、基地問題の解決に向けて米国や日本「本土」に働きかけています。

辺野古基地建設反対テント村（名護市・沖縄県）

Argentina

## アルゼンチンの拉致被害者 五月広場の母たち

1970年代の南米ではすさまじい人権弾圧が渦巻き、チリやアルゼンチンでは何万人という人びとが犠牲になりました。ブエノスアイレスにある五月広場では、軍政時代に「反政府活動家」とみなされ拉致された息子や夫の消息を求める女性たちが今もなお、毎週木曜日にデモを続けています。「五月広場の母たち」と呼ばれるようになった彼女たちの行動に共感し、ともに真相究明を訴えました。

「五月広場の母たち」と行進（アルゼンチン）

Palestine

## パレスチナ 難民キャンプを訪ねる

世界で最も長い間、最も多くの人たちが故郷を追われ、難民状態に置かれているパレスチナ難民問題。

ピースボートでは、パレスチナやヨルダンの難民キャンプを訪問し、文化交流やホームステイを行うとともに、そこで暮らす人たちをサポートするため、フェアトレードプロジェクトや現地訪問ツアーを実施してきました。

パレスチナ難民キャンプ（ヨルダン）

Denmark

## 原発依存から 自然エネルギーへ

原発ゼロのデンマークでは2050年までにエネルギー消費量の100%を自然エネルギーに転換することを決めています。しかし30年ほど前までは、この国のエネルギーは日本同様、化石燃料が中心でした。

エネルギーシフトはなぜ実現したのか――ドイツや北欧など自然エネルギーの先進地域に学び、持続可能な未来をつくる道のりを探ります。

ミドルグロン洋上風力発電所（デンマーク）/写真提供 スカンジナビア政府観光局

Tahiti

## 植民地に反対しタヒチ 先住民の伝統を取り戻す

20世紀末まで、フランスによる核実験が繰り返されたタヒチ（仏領ポリネシア）。フランスからの独立をめざす先住民の人びとは、伝統的な暮らしを取り戻すために、タヒチ本来の自給自足の生活をはじめました。

ピースボートは、彼らが栽培するバニラなどのフェアトレードをサポートするなど、人とモノとの交流を通してタヒチの現実を伝えています。

伝統的作物の栽培を体験（タヒチ）

Canada

## カナダ先住民 ファーストネイションと開発

多文化主義を掲げるカナダでは、先住民の人たちと一般社会がより良い関係を築く努力が続けられてきました。一方で、今も差別が続き、彼らの土地が開発によって奪われるといった現実があることも確かです。

ファーストネイション訪問は先住民の人たちの声に耳を傾け、「開発と発展」に奔走する現代社会を問い直す試みでもあります。

ファーストネイションの居住区を訪問（カナダ）

# 国境なき大海原をゆく『船』というユニークな空間

船は、私たちと世界をつないでいるだけではありません。国境のない大海原をゆく空間には、さまざまな可能性が広がっています。そこでは、国という存在を離れ誰もが一人の人間として自由に語り合い、自分のアイデアや思いを表現しています。

## 洋上英会話トレーニングで世界中に友だちをつくる

洋上英会話トレーニング「GET」では、英語をコミュニケーション・ツールとしてとらえ、「自分の英語」を使って「自分の思い」を伝えることができるようにサポートしています。

異文化をつなぐ世界共通語としての英語（Global English）を使いこなし、世界中の人と友だちになることができます。

## モンテッソーリ洋上保育園「ピースボート子どもの家」

子どもに自由な環境を提供して、自然に備わっている好奇心や集中力を育む「モンテッソーリ教育」を、洋上で実践する「ピースボート子どもの家」。

船旅を通じて、地球が直面する問題を家族で学び、体験することで地球市民としての感覚を養うプログラムでもあります。

## 「平和の創り手」を育てる地球大学

多彩な専門家による洋上ゼミと、寄港地でのスタディーツアーを組み合わせて行われる「ピースボート地球大学」。

将来、NGOスタッフや国際機関、地域活動など、さまざまな分野で活躍する「平和の創り手」を担う人材育成をめざしたプログラムです。

# ピース＆グリーンボート

## 韓国のNGO「環境財団」とともにクルーズを行っています

2005年から韓国のNGO「環境財団」とともにはじめた、日韓のクルーズ。洋上で日韓の参加者が交流しながら、アジア各地をめぐります。ピースボートがはじまった1983年は、韓国は軍政のまっただ中で、このようなプログラムの実施は想像もできませんでした。

船内では日韓双方の言葉が飛び交い、両国の映画、音楽、踊りなどを存分に満喫。同時に歴史を学び環境問題を知り、平和でエコな東アジアをめざします。

短期間で各地の見どころをめぐるピース＆グリーンボートは、ピースボートの船旅を体験できるショートクルーズとしても人気です。2013年10月には、博多、釜山、基隆、沖縄、上海をめぐる第6回目となるピース＆グリーンボートの航海が出航しました。

# 世界中の若者が船上で交流

## 国境のない洋上だからできる、対話の場づくり

中東や旧ユーゴスラビアなどの紛争地や中南米、アフリカのNGOで活躍する若者を船上に招き、「船」というどこの国にも属さない平和な空間を、対話の場として提供する国際学生プログラムを行っています。このプログラムを通じて、若者たちは対話の重要性や紛争解決法を学びます。彼らの多くはここでの経験をもとに、それぞれの故郷で平和活動や人道支援活動に携わっています。

対話を訴えて一緒に演奏するイスラエル（左）とパレスチナ（右）の若者

国際学生プログラムでは、アジア、アフリカ、中東、ヨーロッパ、ラテンアメリカなど世界各地から招待した若者との洋上国際交流も行っています。

ツアー、レクチャー、ワークショップそして文化や音楽を通じての交流で信頼関係と国境を越えた友情を育みます。

# 地球環境への とりくみ

世界を旅する中で感じることは、この素晴らしい地球の環境が危機にさらされている現実です。

ブラジルのアマゾン川流域では、日本企業が関わる大規模な開発によって広大な森林が日々消滅し、また化石燃料が原因とされる地球温暖化によって、南極やアラスカ、南米パタゴニアの氷河は後退を続けています。

ピースボートは世界各地で環境問題に取り組む人びとと連携し、さまざまな活動に関わっています。

グリーン・ベルト運動で知られる故・ワンガリ・マータイさんも生前、ピースボートの世界での環境への取り組みに賛同し、ケニアでの植林プロジェクトをともに行いました。

# 被爆体験を世界に伝える「おりづるプロジェクト」

ピースボートは、核兵器の非人道性を訴え、核廃絶を実現するために「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」（おりづるプロジェクト）を実施しています。

地球一周の船旅に広島・長崎の被爆者が乗船。世界各地で原爆被害の証言を行い、核廃絶のメッセージをアピールしてきました。

政府の非核特使としても公認された被爆者の方々が世界をめぐり直接語りかける証言会には、現地の若者や学生、そして政府高官も参加し、各国で大きな反響を呼んでいます。

おりづる voyage

おりづるプロジェクトは、2008年から2013年までの6回のクルーズで実施。150人の被爆者の方とともに、60カ国以上の国々で証言を行ってきました。（2013年11月現在）

Galapagos

## ガラパゴスの森 再生プロジェクト

急激な開発や、移住者によって持ち込まれた外来種の動植物などにより、「進化論の島」ガラパゴスの貴重な自然が危機に瀕しています。

ピースボートは、フォトジャーナリストの藤原幸一さん、チャールズ・ダーウィン財団と共同で、2007年に当プロジェクトを立ち上げ、ガラパゴスの固有種「スカレシア」の植林を行っています。

ピースボート参加者による植林（ガラパゴス）

El Salvador

## サイクリングで 環境問題をアピール

中米エルサルバドルでは、環境問題に熱心に取り組むNGOセスタによるプロジェクトを体験しました。セスタは世界的にネットワークを広げる国際環境NGO「地球の友（FoE）」加盟団体の一つです。

写真は、車の増加による大気汚染をなくそうと、廃棄された自転車を修理して参加者で自転車通勤を呼びかけるサイクリングキャンペーンを行ったときのものです。

サンサルバドル（エルサルバドル）

El Salvador

## 世界の 戦争被害者と交流

被爆者の方々は、各地で戦争被害者の方々との交流も行ってきました。特に、ベトナムの枯葉剤被害者や、アウシュビッツ強制収容所の生存者などとの触れ合いは、あらためて戦争そのものの非人道性を浮き彫りにしてきました。それぞれの経験を学び合い、核も戦争もない未来をつくるための時代と国境を越えた協力のあり方を模索しています。

内戦の被害者との交流（エルサルバドル）

Tahiti

## グローバル・ヒバクシャ・ネットワークをめざして!!

核の被害者は、広島・長崎の被爆者だけでなく、タヒチの核実験被害者や、オーストラリアのウラン採掘労働者などさまざま存在します。そんな世界各地の「ヒバクシャ」と交流してきた私たちは、グローバルなヒバクシャのネットワークが必要だと感じています。

3.11後は福島やチェルノブイリの原発事故被曝者の方々ともつながっています。

フランス核実験被害者との交流（タヒチ）

# 災害ボランティア
# 人こそが人を支援できるということ

## ピースボート災害ボランティアセンター（PBV）

2011年3月11日の東日本大震災後ピースボートでは一刻も早く、そして継続した支援活動をと、一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター（PBV）を立ち上げました。

宮城県石巻市と女川町を中心に、のべ8万人を超えるボランティアを送り、その被災者救援活動をコーディネート。炊き出し、泥かき、仮設住宅に暮らす高齢者へのサポートなど、地元の方々と力を合わせてさまざまなプロジェクトを行ってきました。またその後、国内外で多発する災害に対して、全国各地のボランティアとともに救援活動を続けています。

### 福島子どもプロジェクト

自然災害に加え原発事故に見舞われた福島では、子どもたちに「夢と健康」を届けようと、保養と国際交流のプロジェクトを実施。参加した子どもたちは、思いっきり外で体を動かし、海外に友だちをつくり、これからの未来を考える学びを体験しました。

### 防災・減災への取り組み

将来の巨大災害に備えるには、平時から防災・減災の担い手となる人材の育成が大切です。全国各地で、またピースボート洋上でトレーニングを受けた若者たちが、すでに多くの被災地でボランティアや、現場のリーダーとして活躍しています。

### 阪神・淡路大震災

「ボランティア元年」と言われた1995年が、ピースボートにとっても災害支援のきっかけ。神戸市長田区を中心に、1,000名以上のボランティアとともに活動しました。この経験が、それ以降のトルコ、台湾、パキスタン、スリランカ、新潟などでの災害救援とPBV立ち上げの礎になりました。

# 9条世界会議
## 世界は9条を選びはじめた

戦争を放棄し、軍隊を持たないと定めた「日本国憲法9条」の理念を世界の人びとに広めようという「グローバル9条キャンペーン」の一環として、2008年、9条世界会議を開催しました。

日本では憲法9条を変えてしまおうとする動きもありますが、この会議では、世界の多くの識者が憲法9条に注目し、賛同していることが確かめられました。また、その後も憲法9条をテーマにしたクルーズを実施するなど、さまざまな活動を行っています。

2008年5月に、3日間にわたって行われたこの世界会議には、全国からのべ3万人以上が参加しました。また、ノーベル平和賞受賞者のマイレッド・マグワイアさんをはじめ、世界41カ国、300名以上の方が駆けつけてくれました。

# 脱原発世界会議
## 今こそ、核のない世界を

ピースボートは、福島第一原発事故による深刻な放射能被害の広がりを受けて、事故の教訓に学び、持続可能な社会を東アジアでつくるため「東アジア脱原発・自然エネルギー311人宣言」を呼びかけるとともに、2012年に大規模な国際会議である「脱原発世界会議」を開催しました。この会議でできたネットワークを元に、脱原発をめざす首長会議も発足しました。

脱原発世界会議は2012年に2度にわたり開催。パシフィコ横浜で行われた1回目の会議には、1万5千人以上が参加しました。インターネットで全世界に中継され、約10万人が視聴しています。また、このときに行われた「脱原発世界大行進」が、その後、空前の盛り上がりを見せた総理官邸前デモにもつながっていきました。

# 国連との つながり

ピースボートは国連の特別協議資格をもつNGOとして活動しています。この資格は、国連の経済社会理事会を通じて、世界中の人びとの声を国際社会に届けることができるというものです。

私たちが生きる世界には貧困が広がり、各地の環境破壊は深刻化し、戦争や人権侵害もなくなっていません。そうした現場からの生の声を届け、国際社会に提言していく活動は、今後ますます重要になっていきます。

写真は、2005年に船が米国ニューヨークに寄港した際、GPPAC（武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ）東北アジア代表として、国連本部の会議場でスピーチを行うピースボート共同代表の吉岡達也。会議のオープニングでは、ピースボートによる和太鼓のパフォーマンスも行われました。

GPPAC

## 武力紛争予防のための グローバルパートナーシップ

世界的なNGOネットワーク「武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ（GPPAC）」は紛争予防や平和構築のための具体的アクションや、政策提言を目的に設立されました。そして、全世界を網羅する15の地域ごとの行動計画を立て国連機関や各国政府とも連携して活動しています。ピースボートはGPPAC東北アジア地域事務局を担当しています。

MDGs

## 国連ミレニアム開発目標 キャンペーンへの取り組み

ピースボートは、世界の貧困をなくすことなど8項目の目標を掲げた「ミレニアム開発目標（MDGs）」の2015年達成に向けても活動しています。そして国際機関やNGOなどと連携しMDGsのグローバルキャンペーンに取り組んできました。また、国連ミレニアムキャンペーンの公式広報船としてピースボートの船体にMDGsのロゴマークをペイント。世界に貧困撲滅のメッセージを届けています。

# ピースボートの あゆみ

| | |
|---|---|
| 1983年 | ピースボート設立<br>第1回クルーズ出航 |
| 1984年 | 船で支援物資を届ける<br>「UPA国際協力プロジェクト」を開始 |
| 1990年 | 日本の団体として戦後初の<br>世界一周クルーズを開始 |
| 1992年 | リオデジャネイロで開かれた<br>「国連地球サミット」に参加 |
| 1995年 | 阪神・淡路大震災での災害ボランティア活動<br>エリトリア・オリンピックキャンペーンを実施 |
| 1998年 | 「ピースボート地雷廃絶キャンペーン（P-MAC）」を開始<br>核実験直後のインドとパキスタンで<br>広島・長崎の原爆写真展を実施<br>第1回ピースボート平和賞を<br>ミハイル・ゴルバチョフ氏に授与 |
| 1999年 | 初の南半球航路世界一周クルーズを実現<br>サッカーによる国際交流・協力<br>「ピースボールプロジェクト」を開始<br>「ハーグ国際平和市民会議」に参加<br>ピースボートクルーズが、UNESCO<br>「平和文化の国際年」公式プログラムに認定<br>国際学生（IS）プログラムを開始<br>グローバルイングリッシュ・<br>トレーニング（GET）開始 |
| 2000年 | 「地球大学」プログラム開始 |
| 2002年 | 国連経済社会理事会（ECOSOC）との<br>特別協議資格を取得 |
| 2003年 | 第2回ピースボート平和賞を<br>デズモンド・ツツ大司教に授与 |
| 2004年 | 世界社会フォーラム（WSF）に参加 |
| 2005年 | 国連本部で開催された<br>GPPAC世界会議に参加 |
| 2005年 | 初の日韓共催クルーズ<br>「PEACE＆GREEN BOAT」を実現<br>イラク・ファルージャ病院に車イス100台を送る<br>ベトナム枯葉剤被害者支援を開始 |
| 2007年 | 「旅と平和」エッセイ大賞を開始<br>ガラパゴスの森再生プロジェクトを開始<br>ベネズエラ音楽教育「エル・システマ」との<br>共同キャンペーンを開始<br>グローバル9条キャンペーンを開始 |
| 2008年 | 幕張メッセにて「9条世界会議」を開催<br>初の南極航路世界一周クルーズを実現<br>「ヒバクシャ地球一周の船旅 証言の航海」を開始 |
| 2009年 | 国連ミレニアムキャンペーンとの<br>共同プロジェクトを開始<br>洋上モンテッソーリプログラム<br>「ピースボート子どもの家」を開始 |
| 2010年 | 洋上フリースクール「グローバルスクール」を開始 |
| 2011年 | 宮城県石巻市を中心に<br>東日本大震災の災害ボランティア活動開始<br>ピースボート災害ボランティアセンター（PBV）設立<br>のべ8万人のボランティアを被災地へ<br>福島子ども支援プロジェクトを開始 |
| 2012年 | パシフィコ横浜にて「脱原発世界会議」を開催<br>米北東部にて「ハリケーン・サンディ」の被災者支援 |
| 2013年 | ピースボートクルーズ第80回目を実施 |